『トム・ジョウンズ』に於ける隠された事実など

雲　島　悦　郎

目　次

はじめに
1. 捨て子事件
2. ブリジェットの結婚
3. 更なる冤罪事件
4. 匿名の送金者
5. 小鳥事件
6. ブリフィルの隠された「殺意」
7. ブリフィルの隠された意図
8. ウォーターズ夫人の再度の誘惑
9. その他の事例
おわりに

はじめに

ヘンリー・フィールディング（1707-54）の『トム・ジョウンズ』(1749)[1]に於いて，「作者」(“Author”)[2]は「賢明な読者」（“sagacious Reader”）に対し再三にわたり洞察力（Sagacity）を働かせて作品を読むように要請する。そして「作者」によると，洞察力を働かせるとはつまるところ推測（Conjecture）をすることであり，「作者」は読者にその能力がそなわっているかどうか試すべく，半ば戯れに読者に練習用の「課題」（“Task”, [III, i]）を提供したりする。だが，たとえ如何に慧眼の読者であろうと，作品を一回読んだだけでは十分推察できないと思われる部分があちこちにある。

凡そ優れた文学作品ならば，一回読んだだけで十分に理解できるようなことは余りなかろうが，それとは違う意味で『トム・ジョウンズ』には一回読んだだけでは到底分からないように仕組まれている部分があるので，それ故に再読を前提とした作品だと言われる[3]。そして，一度作品を読了してから，作品の重要な事実を頭に入れて再読すると，やっと面白味の分かる表現がふんだんに用意されていることに気付かされる。

この作品に於ける最も重要な事実――しかも最初のうちは秘密――は，トムを生んだのが地主オールワージーと同居する彼の妹のブリジェットだということだが，これを知った上で作品を読むと，初めてこの作品を読む読者がまだこの事実を知らないはずの段階で，この事実をつかんでいる弁護士ダウリングがこの事実を知らないトムに向かってオールワージーのことを「君の伯父さんのオールワージーさん」（“your Uncle *Allworthy*” [XII, x]）と言う場合の面白さが初めて理解できる。また，トムがオールワージーの病気が快方に向かっていることを知ってはしゃいでいるとき，ブリフィルが，その直前に受け取った母親の訃報の方は周囲の者に知らせながら，同時に受け取った，トムがブリジェットの子であるという知らせは誰にも伝えずに，ブリジェットの死を失念したようなトムの振る舞いを詰って，不幸にも亡くなったのが自分の母親でもあることが分っていないトムに対し，「悲しい光景を見ても目の見えない者がなんの感銘も受けないのは当然の話さ。ぼくは不幸にしてぼくの親が何者だか分っているし，したがってその親が亡くなれば悲しいんだ」（下線筆者，“It was little to be wondered at, if tragical Spectacles made no Impressions on the Blind; but, for his Part, he had the Misfortune to know who his Parents were, and consequently must be affected with their Loss.” [V, ix]）と言うとき，自分が私生児であることを侮辱されたとしか理解できずに怒るトム以上にその言葉の意味を知ることは読者には初読の段階では無理である[4]（もっとも，作品を一読しないと，ブリジェットがトムの母親であるという事実は分からないということを前提にしての話

であり，何か別の手段で――あらすじを前もって読むなど――予めこのような事実を知った上で作品を読むならば話は別である)。

しかし，たとえ再読の場合でも，作品に更に巧妙な仕掛けがあることを意識して掛からないと気付かないような，隠された意味がある場合も少なくはなく，そういう意味でフィールディングの作品は隠し絵(5)と通じるところがある。この作品では，「隠す」(“conceal”) ――ひいては「騙す」(“deceive”) ――と「発見する」(“discover”) は重要なキー・ワードであり，色々な物事や更に人物までが隠され――そのために人は騙され――そして発見・暴露されるが，それが作品の隠し絵あるいは騙し絵的特性とつながっているので，そういう側面についても触れることにする。

『トム・ジョウンズ』の作者はホラティウス (Horace) のいう「不信の嫌悪」(“incredulous Hatred” [VIII, i]) を避けることを旨とし，可能性 (Possibility) だけではなく，蓋然性 (Probability) の埒を守らねばならぬと言明する。また，作品に於ける真実の判断で最終的に依拠すべき権威 (Authority) は「膨大な真正の自然界の過去帳」(“the vast authentic Doomsday-Book of Nature” [IX, i]) であり，作品中の出来事は「自然の手段」(“natural Means”) で説明できると言う。それ故に，語り手の語る事柄に不自然で信じられないようなところがあれば，そこには隠された事実があり，それを補うことによって自然に説明できる可能性があると言える。また，本作品では「人格の一致」(“Conservation of Character” [VIII, i]) が重視されているので，登場人物はその性格にふさわしい行動を取るから，これが判断の一助になる。そして，読者が全然気付かないようでは困るはずだから，何かが隠されていることを示す指標のようなものが手掛かりとして存在する。本論では作品のこのような特徴を幾つかの具体例を挙げて論ずることにする。

1. 捨て子事件

『トム・ジョウンズ』(正式には『捨て子トム・ジョウンズの物語』[*The History of* Tom Jones, *a Foundling*]) は主人公トムとソファイアの恋物語の側面があることに間違いはないが，物語そのものは二人の恋が芽生えるよりもずっと以前に始まる。そして物語に於ける最初の大きな出来事は作品の題名にもうかがわれるように，主人公自身が捨て子として発見される事件である。そして，これは単なる出来事ではなく間違いなく事件である。それ故，作品には推理小説的な側面が生じ，誰がトムを捨てたかという謎の解明が作品に於ける一番の関心事となり，トムとソファイアがめでたく結ばれるのは，むしろこの問題が解決された後に来る幸福な終結部分で，副次的なものと看做すこともできる(6)。

この捨て子事件はよりによって治安判事オールワージーの邸で起こるので，邸の主(あるじ)オールワージーの治安判事としての資質・適格性も問われることになる。彼は非常に慈悲深い性格の人間であると共に，治安判事として人を裁くうえで大切な公平性などもそなえた立派な人物であるが，語り手の言うように完璧な人間などいない訳で，彼もやはり弱点をそなえている。そして，彼の弱点の一つは，人を見る目がないことで，身辺にいつも怪しげな人間をおいている。それに洞察力や状況を読み取る力や想像力に乏しい。語り手は，そうではないとしきりに弁護するけれども，そういう側面をやはり否定できない(7)。

その彼は自分の寝床に捨て子を発見すると，早速その慈悲深さを発揮するが，治安判事らしく出来事の状況を考えて何者の仕業かを推理する素振りも見せず，早々と捨て子を自分の養子とすることに決め，犯人捜しは家政婦 (女中頭) のデボラ・ウィルキンズに任せてしまう。すると彼女は自らの予断と偏見に基づき，口さがない世間――群集 (Mob) で代表される――の噂をたよりに犯人捜しを開始する。そして，ジェニー・ジョウンズという娘が疑いをかけられることになるが，彼女は厳しい追求を受ける前にあっさり自分がトムの母親だと虚偽の自白をする。けれども，オールワージーに「……何もあだな好奇心でたずねたのではない。そいつを罰したいと思ったのだ。少なくともそういう人非人に，知らずに恩恵をほどこすことのないようにと思ったのだ」(“ . . . it was not from a Motive of vain Curiosity he had enquired, but in order to punish the Fellow; at least, that he might not ignorantly confer Favours on the Undeserving.”

[I, vii]）と言われても，彼女は相手との約束を盾に父親の名は頑として明かそうとしないので，オールワージーは名誉と誠実を重んじる彼女の態度を尊重して聞き出すのを諦める。こうして本人の自白だけで十分な証拠もなく彼女の有罪が決定してしまう。そして，世間の期待に反してジェニーに対し寛大な処置を取ったオールワージー自身が捨て子の父親だという噂が立ち始める。だが，捨て子の母親はジェニーでもなければ，父親はオールワージーでもなく，トムを生んだのは実はブリジェットであり父親はオールワージーの世話を受けていたサマーであったことが作品の最後の方でやっと判明するけれど，この事実を知った上で作品を読み直すと，読者もオールワージーと同様にトムの「捨てられた」状況に犯人を暗示する事実があるのを見落としていたことに改めて気付かされる。

オールワージーのロンドンからの帰邸に際し彼を見舞った「怪事件（奇怪な偶発事）」（“odd Accident”）は次のような語りから始まる。

> オールワージー氏はある特殊な用件でロンドンに出て，まる三ヶ月不在だった。その用件が何だったかは知らないが，長年のあいだ長くてひと月とは留守にしたことのない家からこんなに長いあいだ離れていたことで，その重要さがわかろうというものだ。彼はある晩おそく帰ってきて，妹と簡単な食事をすませると，非常に疲れて寝室に引き取った。（下線筆者，「まる三ヶ月」は原文では“a full Quarter of a Year”）

> Mr. *Allworthy* had been absent a full Quarter of a Year in London, on some very particular Business, though I know not what it was; but judge of its Importance, by its having detained him so long from home, whence he had not been absent a Month at a Time during the Space of many Years. He came to his House very late in the Evening, and after a short Supper with his Sister, retired much fatigued to his Chamber. (I, iii)

そして，彼がいつものようにお祈りを済ませて寝床に入ろうとして，掛け布団をめくると，そこに一人の赤ん坊が気持ちよさそうに眠っている。

フィールディングの作品では，偶発事（Accident）のように見えて実は偶発事でなく，裏に人間の意図が働いていることがあるが，この捨て子事件もオールワージーの帰宅の日に偶然に起こったのではなく，誰かがその日を待って実行したことが上の事実にうかがえそうである。いつものように一月ぐらいならまだしも，今回だけ三ヶ月の出張だとすると，オールワージーの行動を正確に把握し，帰宅の日時を予測して対処するのは外部の人間には相当困難である。それも昼間ではなく夕方だから時間も切迫してくる。日時だけではなく，その他の状況にも，全く外部の者だけの仕業（犯行）とは考えにくい，不自然なところがあるので，内部犯行か内部に手引きした者がいることを示唆しているのだが，オールワージーを始め邸の者は誰も——また読者の多くも——その不自然さに気付かない。それに，語り手の「ある特殊な用件」（“some very particular Business”）という表現もいかにも意味ありげであるが，語り手はその用件が何か知らないとも言う。それでも，不在期間の長さから「その重要さ」が分かるだろうというが，この表現も何か裏があることを臭わす指標である。

そもそも，捨て子というものが人の出張の都合に合わせて簡単にできるものだろうか。当時でも，身重の状態を周囲に隠して密かにお産をし，その事実を隠し続けるのは大変であったに違いない(8)。それに，ここの出張期間の「三ヶ月」は特に意味深長である（本作品では“three months”という表現が5回使われているのに，ここでそれが使われなかったのは事実をぼかすためか）。それは丁度，出産前のお腹の大きさの目立つ時期と出産・出産後の僅かの期間を表していると考えられる（因みに，妊娠期間の9ヶ月を3ヶ月ごとに区切り，最後の3ヶ月を第3トライメスター [the third trimester] という）。そうこう考えると，実は誰かがオールワージーの出張期間に合わせて捨て子の計画を実行したというより，むしろオールワージーの出張期間の方が出産と捨て子の都合に合わされていることが分ってくる。そうだとすると，それを仕組むことができたのはオールワージーの身近な存在で，それはただ一人彼の妹のブリジェットしか考えられ

ない。そして，それを実行するには協力者が必要であるが，ブリジェットと例の悪徳弁護士ダウリングとの間につながりがあったことが後に明らになるので，手を貸したのは彼の可能性も否定できないけれど，トムが生まれる以前から——20年以上にも亘って——両者の間につながりあったかどうかは定かではない。しかし，彼ではなくても，彼と同じように悪知恵に長けた法律の専門家にならば，疑うことを知らぬオールワージーに適当な用事を作って彼をロンドンに引っ張り出し，そして適当な時期まで出張を長引かせることなど容易なことであろう。語り手は最後の最後まで決してそのような事実があったことを読者に明かさないが——「ある特殊な用件」が何であったかも勿論明かさない——，しかしこれは勝手な想像とは言えまい。丁度，隠し絵で，通常の見方では気付かなくても，特別の視点を持つと隠された図柄が見えてくるように，トムを生んだのが実はブリジェットであり，彼女がジェニー母娘の助けを借りて，兄の邸で周囲の者に気付かれないようにお産を済ますために打つべき手を色々と打って兄を騙すのに成功した事実をジェニーの話から知った上で作品を読み直すと，それまで見えなかった事実が見えてくる。実際，彼女のお産の日が来ると，奉公人の中でも一番警戒すべきデボラ・ウィルキンズは，「一週間ばかり待機させられて，あまり早く出してやれば帰りが早すぎていけないといろいろな口実で延ばし延ばしされて」(“ . . . who had been kept a Week in Readiness, and put off from Time to Time, upon some Pretence or other, that she might not return too soon, . . .” [XVIII, vii]) いたけれども，ついに遠方に使いに出されるし，それより前に，日ごろ身近に接していたブリジェットの小間使いは，何と！出産の「三ヶ月」(“three Months”) 前に暇を出されたことが分かるのである（そして，出産後，オールワージーが帰宅する日まで——その期間は不明であるが——，しばらく赤ん坊はジェニーの家に預けられたという)。

更に，捨て子が邸の主人のベッドの上に寝かされていたのも普通ではない。捨て子は，直ぐ後で引用するウィルキンズの台詞にもあるように，普通，赤ん坊をバスケットか何かの中に入れて誰かの家の入口などに置くのであり，邸の主人のベッドの上に置くなどということは，内部で手引きする者がいなければ簡単にはできることではないし，その上，邸の主人のベッドに寝かせるというような図々しいことは下手をすれば怒りを招くおそれもあるので，慈悲を求める者なら普通はしないことだろうから，捨てられた場所自体が捨てた者の素性を暗示していると言える。ブリジェットにとってこれはごく自然な振る舞いであったろうが，それだけではなく，そこにはウィルキンズに対する警戒心も読み取れなくはない（もっともウィルキンズは赤ん坊がベッドに寝かされていた事実を，子供を捨てた女が父親の罪をオールワージーになすりつけようとしたものだという風にしか理解しない)。

本作品では登場人物の私生児に対する見方がその人格を表すようになっているが，ウィルキンズは私生児に対し，次のように述べるほど冷酷な人物である。

> 「……私としましては，身持ちのいい人の子供ならともかく——こういう生まれ損いの子供などはわたしとしてはさわるのもいやでございます。同じ人間同士とは思えません。ああ，いやなにおい！キリスト教徒のにおいではありません。思い切って私の意見を申してもよいのなら，私はこの子をバスケットに入れて誰かに持たせて村役人の家の入口に棄てさせたらよいと思います。すこし雨と風はありますが静かな晩ですし，ちゃんとくるんで暖かいバスケットに入れておけば，朝になって人の目にふれるまで生きていないということはありますまい。たといまた生きていないとしても，我々としてはするだけのことはしたわけで義務ははたしたというものです。こういう人間は大きくなって母親の真似をするよりも，罪のない赤ん坊のうちに死ぬほうがいいのかもしれません。どうせ碌なことをするはずはないのですから。」

> ‘ . . . For my own Part, if it was an honest Man’s Child indeed; but for my own Part, it goes against me to touch these misbegotten Wretches, whom I don’t look upon as my Fellow Creatures. Faugh, how it stinks! It doth not smell like a Christian. If I might be so bold to give my Advice, I would have it put in a Basket, and sent out and laid at the Church-Warden’s Door. It is a good Night, only a little rainy and windy; and if it was well wrapt up, and put

in a warm Basket, it is two to one but it lives till it is found in the Morning. But if it should not, we have discharged our Duty in taking proper Care of it; and it is, perhaps, better for such Creatures to die in a State of Innocence, than to grow up and imitate their Mothers; for nothing better can be expected of them.' [I, iii]

だから，もしトムが普通の捨て子の場合のようにオールワージーの邸の入口に捨てられていたらどんなことになったか分かったものではないので，ウィルキンズの人柄をよく心得ているブリジェットが危険を察知してベッドを選んだと読めなくもない。因みに，トムは後に「……馬を盗んで縛り首になったやつの私生児だぜ。オールワージーさんの門前に捨てられてさ，召使の一人が，雨水でいっぱいの箱の中に入れてあるのを見つけたんだ。……」(" . . . He was dropt at Squire *Allworthy*'s Door, where one of the Servants found him in a Box so full of Rain-water, . . ." [VIII, viii]) というデマを飛ばされることになる。

ウィルキンズはオールワージーが自分のベッドに赤ん坊を発見した直後，彼に寝室に来るように命ぜられるが，その時の状況が次のように説明されている。

……この光景に彼 [オールワージー氏] はしばらく呆気にとられていたが，彼の心中で人のよさが勝ちを占めるのはいつものこと，やがて眼前のかわいそうな赤ん坊への同情の気持ちが湧いてきた。そこでベルをならし，年配の女中頭にすぐ起きてくるように命じておいて，さて待つあいだにも，彼は眠っている幼児に必ずつきものの溌剌たる血色のなかにうかがわれる無邪気の美に，ほとほと感じ入って眺めていた。あまり夢中になりすぎて，老婢 [ウィルキンズ] が入ってきた時自分が寝間着であることも忘れていたしまつ。老婢は主人に着がえの時間は十分与えたはずである。というのが彼女は召使いに大急ぎでおこされたのだが，主人が卒中か何かの発作で死にかかっているかもわからないのに，そこは主人への敬意と身だしなみの考慮から，鏡にむかって髪をなでつけるのに数分を費やしたのであった。

これほど厳しくおのれの身だしなみを考える人物が，他人の些細な身だしなみのなさにもびっくり仰天するのは怪しむにたりない。されば彼女は扉をあけ主人が寝室のかたわらに蝋燭を手に寝間着のまま立っているのを見たとたんに，恐れおののいてハッと後退，ちょうどそのとき主人が寝間着に気がついて，何か背中に羽織ってこのデボラ・ウィルキンズ夫人の純潔な目をあきれさせない姿になるまで扉のそとで待っていてくれと彼女の恐怖心を一掃してくれたからよかったものの，さもなかったらそのまま気を失ってしまったかもしれない。この婦人，年は五十二歳ながら，未だかつて服をちゃんと着てない男の姿を見たことがないと断言するのである。口の悪い嘲弄ずきの才子は彼女の最初のおびえようをあざ笑うかもしれないが，もっと謹厳な読者は，深夜寝ているのを起こされて行ってみれば主人がこういう有様というのでは，彼女の行動もまことにもっともと賞讃を惜しまないであろう。ただしデボラほどの年齢になればすこしは思慮分別があっていいはず，そう感心することはないというならまた別の話だ。(下線筆者)

. . . He [Mr. *Allworthy*] stood some Time lost in Astonishment at this Sight; but, as Good-nature had always the Ascendant in his Mind, he soon began to be touched with Sentiments of Compassion for the little Wretch before him. He then rang his Bell, and ordered an elderly Woman Servant to rise immediately and come to him, and in the mean Time was so eager in contemplating the Beauty of Innocence, appearing in those lively Colours with which Infancy and Sleep always display it, that his Thoughts were too much engaged to reflect that he was in his Shirt, when the Matron came in. She had indeed given her Master sufficient Time to dress himself; for out of Respect to him, and Regard to Decency, she had spent many Minutes in adjusting her Hair at the Looking-glass, notwithstanding all the Hurry in which she had been summoned by the Servant, and tho' her Master, for ought she knew, lay expiring in an Apoplexy, or in some other Fit.

It will not be wondered at, that a Creature, who had so strict a Regard to Decency in her own Person, should be shocked at the least Deviation from it in another. She therefore no sooner opened the Door, and saw her Master standing by the Bed-side in his Shirt, with a Candle in his Hand, than she started back in a most terrible Fright, and

might perhaps have swooned away, had he not now recollected his being undrest, and put an End to her Terrors, by desiring her to stay without the Door, till he had thrown some Cloaths over his Back, and was become incapable of shocking the pure Eyes of Mrs. *Deborah Wilkins,* who, tho' in the 52d Year of her Age, vowed she had never beheld a Man without his Coat. Sneerers and prophane Wits may perhaps laugh at her first Fright; yet my graver Reader, when he considers the Time of Night, the Summons from her Bed, and the Situation in which she found her Master, will highly justify and applaud her Conduct; unless the Prudence, which must be supposed to attend Maidens at that Period of Life at which Mrs. *Deborah* had arrived, should a little lessen his Admiration. (I, iii)

デボラ・ウィルキンズの人柄を知った上でこの部分を読めば，読者は装われたきれいごとの陰にある真実に直ぐ気付くだろう（ここのウィルキンズの仕草は，『ジョウゼフ・アンドルーズ』の中で，追剥に襲われた後で裸同然の姿のジョウゼフを目にして，扇子で顔を覆いながら，その骨の間から覗いて見ていた偽善的な女性を思い起こさせるが，この場面にそのような偽善の暴かれる滑稽さを読み取るだけでは不十分である)。いつの世にも——他人のためとかいう——お為ごかしには往々にして嘘があるが，ウィルキンズが，主人が死にそうであるかも分らないのに，主人への敬意と身だしなみの考慮から，鏡に向かって髪をなでつけるのに数分を費やしたというのはやはり不自然で嘘っぽい。

作者は別の箇所で推測（憶測）の必要性に関連し，人の性格の判断と行動の予測について，次のように述べている。

今ここに提案したような憶測に精神の最高の働きを動員することは非常な利益となろう。いかなる事情の下にあれ，人の性格からその行動を予測できるということは，行動から性格を判断するよりも一段と有用な能力だからである。性格から行動を予測することがより大きな洞察を必要とするのは余も認めるが，しかも真の知者ならば，行動から性格を判断するに劣らぬ確実さでこれを成しとげ得るのである。

Now, in the Conjectures here proposed, some of the most excellent Faculties of the Mind may be employed to much Advantage, since it is a more useful Capacity to be able to foretel the Actions of Men, in any Circumstance, from their Characters, than to judge of their characters from their Actions. The former, I own, requires the greater Penetration; but may be accomplished by true Sagacity, with no less Certainty than the latter. (III, i, 下線筆者)

「真の知者」，即ち「本物の洞察力を持つ者」なら，人物の性格から行動をかなり確実に予測できると言うが，それは性格から行動の動機も推測しているのである。そして，先ほどの場面で，ウィルキンズが身づくろいに時間をかけるのは，引用文中の「より謹厳な読者」(“my graver Reader”) が，彼女がベッドから呼び起こされた時刻等から推察したように（訳文では十分に伝わらないかもしれないが)，彼女は実は自分が主人から夜伽(よとぎ)を命じられたと誤解したために，それに積極的に応ずるべくおめかしに時間をかけたと読める。そう取ると，ウィルキンズの上記の仕草にはオールワージーの寝間着姿を目にして，自分の予想通りの展開になったと思いながらも羞恥を装う滑稽な姿が見えてくる。そして作者はそのような偽善者の期待を見事に打ち砕いてみせているのである。隠し絵で言えば「主人への敬意と身だしなみの考慮から」という動機の視点を外して，別の視点から眺めると，図と地が入れ替わって，別の図柄がくっきりと見えてくるのである。そして，もし語り手が自分の言うことを信じているとするなら，真実をよく知らないという意味で頼りない語り手であるし，敢えて嘘をついているとしたら，そういう意味で信用できない語り手である（しかし，ウェイン•C•ブースのいう「信頼できない語り手」とは違う)[9]。

捨て子が見つかった翌日，朝食時に，オールワージーが妹にプレゼントしたいものがあると切り出すと，——語り手の推測するに——妹はガウンか何かだと想像して兄に感謝する（勿論これも語りの嘘である)。そして語り手は，妹は衣服などには重きをおいていないが，兄を喜ばすために——語り手はここで念を押す

——身を飾るという（すでにこの段階でも，語り手は物語中の最大の秘密を守るために，全知のスタンスを崩して，読者と同じように登場人物の気持ちを推し量ったり，登場人物の言い分をそのまま伝えたりする)。その場面は次のように語られている。

> オールワージー氏とブリジェット嬢との間に朝の挨拶よろしくあって，お茶がつがれると，彼はウィルキンズ夫人を呼んでおいて，今日は贈り物があると妹に言う。妹は礼を言う——ガウンか何か身につける品でももらうのだと思ったらしい。事実そのような品を贈ることも珍しくなく，妹は兄への心づくしに手間暇かけて身を飾るのだ。くりかえしていうが兄への心づくしになので，この婦人，衣裳とか衣裳に憂き身をやつす女性とかには，常にこの上ない侮蔑を表明しているのである。

> The usual Compliments having past between Mr. *Allworthy* and Miss *Bridget*, and the Tea being poured out, he summoned Mrs. *Wilkins*, and told his Sister he had a Present for her; for which she thanked him; imagining, I suppose, it had been a Gown or some Ornament for her Person. Indeed, he very often made her such Presents; and she, in Complacence to him, spent much time in adorning herself. I say, in Complacence to him, because she always exprest the greatest Contempt for Dress, and for those Ladies who made it their Study. (I, iv)

ここでは語り手の念押しが，却って彼の言うことが本当ではないことを示唆しており，ブリジェットは少なくとも衣裳に対しては侮蔑の念など抱くはずがなく，衣裳に執心している点は多くの女性と変わらないのである。

そして，一度作品を読み通すと，ブリジェットの淫乱振りがすっかり明らかになるが，この段階では語り手はいかにも彼女が淑徳を重んじる女性かのように語る。更に，彼女が気前良くトムのために必要な物を揃えるようにウィルキンズに命じたとき，語り手は「その指図は実に至れりつくせりで，たといこれが自身の子であったとしてもこれ以上はできまいと思えた」("Her Orders were indeed so liberal, that, had it been a Child of her own, she could not have exceeded them:…" [I, v, 下線筆者]) などというが，下線部を文法通りに理解すれば，トムは実際にはブリジェットの生んだ子ではないと言ったことになるので，語り手はここでも嘘を吐いていることになる。

2. ブリジェットの結婚

捨て子事件とどれぐらいの時間的な隔たりがあるか正確には不明だが，オールワージーの邸にブリフィルという医師が食客として滞在している。この人物は医術より神学に造詣が深い。そして，「彼の信心が本物かうわべだけかは，真偽を見わける試金石を持たぬ私はあえて断定することをさし控えよう」("Whether his Religion was real, or consisted only in Appearance, I shall not presume to say, as I am not possessed of any Touchstone, which can distinguish the true from the false." [I, x]) と「作者」(語り手) は言う。『トム・ジョウンズ』の語り手は全知の語り手としてよく引き合いに出されるし，実際に登場人物の行動の動機などを詳しく説明してみせるときもあるが，一方ではこの場合のように，登場人物の内心等に関し，正確には分らないような素振りをすることも頻繁にある(10)。

また，ブリジェットに関しては，最初の方では彼女が聖女（聖ブリギッド）の名に相応しい貞潔な女性であるかのような口振りである。そして，「すべて共感の存するところに愛が生まれやすいのであるが，性を異にする二人の間の宗教的共感以上にひたぶるにかかる傾向を生むもののないことは経験の教えるところである」("As Sympathies of all Kinds are apt to beget Love; so Experience teaches us that none have a more direct Tendency this Way than those of a religious Kind between Persons of different Sexes." [I, x]) ので，医師は自分がブリジェットに憎からず思われていることを感知するが——その後の二人のた

だならぬ関係をにおわせる——，残念ながら彼は既に妻帯しており，妻は健在で，そのことをオールワージーに知られている。そこで，彼は自分の代役に弟のブリフィル大尉を呼び寄せると，弟は邸に来てから一週間もしないうちに「愛の技法の達人」（“Master of the Art of Love” [I-X]）振りを発揮し，一ヶ月余りで相手の守る要塞を無条件降伏で陥落させ——即ち求愛に成功し——，更に一月足らずで（秘密）結婚に漕ぎ着ける（ただ，語り手が描く大尉の風貌や物腰はいかにも粗野で，そんな彼がどんな「愛の技法の達人」振りを発揮したのか不明であるので，彼とブリジェットの結婚には謎が付きまとう）。そして，兄弟の予想に反して，オールワージーがこの結婚を快く事後承諾すると，弟は間に入ってくれた兄がオールワージーに洩らした言葉を根に持って，兄を厄介者扱いし始め，兄は耐え切れずに同家を去り，間もなくロンドンで失意のうちに亡くなったという。そして，語り手は，兄弟の前歴を丹念に調べた結果，二人の不和の原因は兄の能力に対する弟の嫉妬であることが分ったという。このように，語り手は自分が調査しなければ作品世界の事実が把握できない存在のように装い，そして「〜かどうか断定は控える」（“Whether . . . , I will not determine . . . ”）というような表現を連発し，登場人物の行動の理由についても，「どういう訳か分らないが」（“I know not for what reason, . . .” [II, iii; IX, ii; X, ix]）と言ったり，更には「……我らの役目は事実を語ることにある。原因の探究はもっとすぐれた天才にゆだねたい」（“ . . . it is our Province to relate Facts, and we shall leave Causes to Persons of much higher Genius.” [II, iv]）などと言う始末である。それ故に，語られることは往々にして「読者が判断力と思考力を発揮すべき事柄を多く含んでいる」（“Containing much Matter to exercise the Judgment and Reflection of the Reader” [II, v]）ことになる。

二人が結婚してから八ヵ月後に——「九ヵ月」がいわゆる「十月十日」に相当——，見たところは発育十分の男子が生まれるが，産婆の判断では一月も月足らずだったと言う。だが，これは産婆に渡された金が物を言った結果に違いなく（作者の謂うところの「黄金論法」[“Golden Arguments” (XII, ix)]の成果），実は婚前交渉があったことを示唆している。そして，生まれた子供がブリフィル大尉の子であるとするなら，ブリジェットはブリフィル大尉の求愛を受け入れた頃に彼に体を許したことになる（「要塞の陥落」にはこういう意味も含まれることになる）。

3. 更なる冤罪事件

兄を厄介払いしたブリフィル大尉はトムをも邪魔者扱いする。そのうち，ウィルキンズの耳に小バディントン（Little Baddington）という村の学校経営者パートリッジとその妻の痴話喧嘩の話（Story）が入る。原因は，同家から解雇されてから九ヶ月も経たないうちに元召使のジェニーが二人の私生児を生んだという風聞がパートリッジの妻にも伝わったからである。ウィルキンズはこの話によってトムの父親が終に判明したと思うけれども，このことはしばらく黙って伏せておく。しかし，ブリフィル大尉のトムに関する意向を察知すると，将来，自分の主人におさまりそうな大尉に対して点数稼ぎをしようとして，彼女はその噂を大尉に伝える。そして，その話がオールワージーに達するまでには大尉の思惑もあって多少日数が掛かるものの，終にパートリッジ夫妻はオールワージーに呼び出され詮議を受ける結果となる。そして裁きの結果，パートリッジは妻の偽証によって，ジェニーにトムを生ませた張本人だという濡れ衣を着せられる破目になる。パートリッジがジェニーを証人に呼ぶように求めたので，判決は数日先延ばしになるが，その時既に彼女は出奔した後で事実の確認ができないまま，オールワージーはそれでも証拠十分ということでパートリッジに有罪を宣告し，ここに一つの冤罪事件が成立する。しかし，オールワージーは以前にジェニーを取調べたとき，彼女が誓言した，トムの父親に関する意味深長な言葉「……その男が決して彼［オールワージー］の手の届くところにいないこと，彼の支配の及ぶ人間でもなければご親切を頂戴する可能性もない」（“ . . . that the Man was entirely out of his Reach, and was neither subject to his Power, nor in any probability of becoming an Object of his Goodness. [I, vii]”）を完全に忘れてしまっている（トムの父

親サマーはオールワージーの世話になっていたが，ジェニーのこの言葉はトムが生まれた時点で父親は既に亡くなっていたことを示す)。

だが，語り手は更には別に犯人がいる可能性も次のようにほのめかす。

> ……この教師が完全に無罪である可能性もなしとはしない。なるほどジェニーが小バディントンを去った時期と彼女の分娩の時とをくらべると，彼女がそこでこの子を妊(みごも)ったことは明白に見えるが，しかも必ずしもパートリッジが父親にちがいないということにはならない。というのは，他の詳細は省くとしても，この同じ家に十八になろうとする少年があって，これとジェニーとの間に当然嫌疑をかけて然るべき十分な親交があったのである。しかも嫉妬の盲目さは，憤怒に狂う妻の頭にこの件を一度たりとも想起させなかったのである。

> . . . there is a Possibility that the Schoolmaster was entirely innocent: For tho' it appeared clear, on comparing the Time when *Jenny* departed from *Little Baddington*, with that of her Delivery, that she had there conceived this Infant, yet it by no means followed, of Necessity, that *Partridge* must have been its Father: For, to omit other Particulars, there was in the same House a Lad near Eighteen, between whom, and *Jenny*, there had subsisted sufficient Intimacy to found a reasonable Suspicion; and yet, so blind is Jealousy, this Circumstance never once entered into the Head of the enraged Wife. (II, vi)

そして，ジェニーにこのような親密な間柄の男性がいたことは，ジェニー自身が実際にトムとは別の子供を生んだ可能性も出てくるのである。だから，彼女が二人の私生児を生んだという近隣の噂は全く根も葉もないとは言い切れないところがある。

それどころか一方では，語り手は少なくとも言葉の上ではパートリッジをトムの父親扱いをして，「ところがこの紳士［オールワージー］は日に日にますます幼いトムを愛するようになった。まるで息子への異常な愛情によって，その父［パートリッジ］への苛酷を帳消しにしようと企てるもののように」("On the contrary, that Gentleman grew every Day fonder of little *Tommy*, as if he intended to counterbalance his Severity to the Father with extraordinary Fondness and Affection towards the Son." [II, vii]) と言ったりする，悪く言えば虚言者なのである。

4. 匿名の送金者

取調べでも最後まで無実を訴えたパートリッジは，あくまでも白を切り続けたとオールワージーに思われ，オールワージーから支給されていた10ポンドの年金（Annuity）を剥奪される破目になるが，その後，匿名で自分たちに送られてくるお金の出所をパートリッジはオールワージーだと堅く信じる。パートリッジはトムの実の父親はオールワージーであり，地主が自分に罪を着せたから，その罪滅ぼしに金を送ってくれたと思い込んでいるからだ。そしてパートリッジはこの匿名の送金者にずっと拘り続け，後にオールワージーに村を出てから自分の身に起こったことを話す途中で，この点を「それまでは匿名で年12ポンドの扶助料をくれる人があったのです。あれはあなたご自身だったと思うのですが？ほかにそんなことをしてくれる人は聞いたことがありません」(" . . . 'till that Time I received a Pension of 12*l.* a Year from an unknown Hand, which indeed I believe was your Honour's own, for no Body that ever I heard of doth these Things besides . . . " [XVIII, vi]) と言って質すが，オールワージーは何の反応も示さない。パートリッジの話はいつも自分が喋りたいことを喋ってなかなか核心に迫らない傾向が顕著にあり，オールワージーも何度か口を挟んで肝心のことを早く話すように促すので，そのように心の急(せ)く状況でパートリッジの自分に関する推測の言葉を直ちに問題にする余裕はなかっただろうし，それに自分がその送金に関わっていなかったので，何のことか分らず十分に関心が向かないまま，慌しい状況の中で結局何の返答もしないまま

に終わったともとれる（話は変わるが，オールワージーがブリフィル大尉と“Charity”という語の意味に関して討論したときも，相手がその時点ではオールワージーの知らないパートリッジの名前を出したとき，直ぐに尋ねることはしないで，議論が一応終わってから，「ところで先刻君がやくざな奴と言ったパートリッジというのは何者かね？」["who that Partridge was whom he had called a worthless Fellow.?" (II, v)]と問うている)。勿論，パートリッジの推測どおりであって，オールワージーの無回答（沈黙）はそれを認めているとも取れなくはない。しかし，フィールディングの作品では「匿名」は隠された事実を読者に推測するように促す指標の一つであって(11)，事実はそれほど単純なものではなさそうである。匿名の送金についてパートリッジに拘らせているのは作者であるので，作者の期待に応えて，別の人物の心当たりを考えてみると，浮かんでくる人物がブリジェットである。彼女はパートリッジの妻アンに頼まれてオールワージーに年金を継続するように口をきいてやったことが分っているが，語り手はこれに関連し次のように言う。

> ……オールワージー氏は……情けは罪ある者を罰すればたりるとは考えなかったが，さればとて何の理由もなくむやみに重罪人をゆるすことが情けある正当な処置だとも決して考えなかった。事実がすこしでも疑わしいとか情状酌量の余地があるとかなら決して無視しないが，罪人の嘆願や人のとりなしには絶対に動かされなかった。

> . . . tho' . . . Mr. *Allworthy* did not think . . . that Mercy consists only in punishing Offenders; yet he was as far from thinking that it is proper to this excellent Quality to pardon great Criminals wantonly, without any Reason whatever. Any Doubtfulness of the Fact, or any Circumstance of Mitigation was never disregarded; but the Petitions of an Offender, or the Intercessions of others, did not in the least affect him. (II, vi)

また，オールワージー自身が別のところで間違った情けを，「……そういうまちがった情けは，ただ短所だというだけでなくて，不正の一歩手前だし，社会の大きな害毒にさえなる。悪を奨励することになるからな」(' . . . Such mistaken Mercy is not only Weakness, but borders on Injustice, and is very pernicious to Society, as it encourages Vice." [XVIII, xi]) と言って否定する。それに，彼がジェニーに対して言った言葉，「……そいつを罰したいと思ったのだ。少なくともそういう人非人に，知らずに恩恵をほどこすことのないようにと思ったのだ」(前出) も思い出される。

しかし，これらの言葉とは矛盾するように，「この涙金は匿名で彼らに届けられたから，彼らは，読者もむろんそう思われるだろうが，オールワージー氏その人からのひそかな贈り物と思っていた。氏は公然と悪に力を貸す人ではないが，しかも悪人といえどもその貧苦が彼らの不行跡に釣り合わぬほどに猛烈になれば，内密に救済の手を差し伸べることができた」("As this Support was conveyed to them by an unknown Hand, they imagined, and so, I doubt not, will the Reader, that Mr. *Allworthy* himself was their secret Benefactor; who, though he would not openly encourage Vice, could yet privately relieve the Distresses of the Vicious themselves, when these became too exquisite and disproportionate to their Demerit." [II, vi]) とも語り手は言う。しかし，「彼らは思った」としか言っていないし，「悪人といえども……」の部分はあくまでも一般論である。それに「手を差し伸べることができた」であって，「差し伸べた」とは言い切っていない。また，「匿名」はオールワージーの性格にもそぐわないし，何よりも 10 ポンドの年金が 12 ポンドに増額される理由が分らない。

そこでブリジェットの方だが，パートリッジの不幸を引き起こした元凶は彼女であり，彼女は責任を感じたからこそ口利きを引き受けたのであり，それが不首尾に終わったとき，彼女が金を――行動の理由を怪しまれないように――匿名で送ることにしたとしても不思議ではない（隠し事はむしろブリジェットの性格にも相応しい)。また彼女ならば，金額が増えたのも，元の年金の額を正確に知らなかったとか，済まなく思って多少色を付けたというように説明できる。語り手はオールワージーが送ったような口振りではある

が，報告者・推測者としての語り手は余り信頼できない。読者は能動的な読みを求められているが，しかし実際に誰が送ったのか断定できる決定的な証拠らしきものは見つかりそうにない。

5. 小鳥事件

オールワージーに人を見る目や事実を見破る目がないことは「小鳥事件」(12)にも端的に顕れている。ソファイアはトムからもらった小鳥をトミーと名付けて可愛がっているが，ある日，トムとソファイアとブリフィルが一緒に外にいるとき，ブリフィルはソファイアに小鳥をつないだ紐を持たせてくれと頼み，受け取ると足から紐を外して小鳥を放してしまう。それを知ってソファイアが発した悲鳴を聞いたトムが駆け寄り，木の枝にとまった小鳥を捕らえようとして木に登るが，その大枝が折れてトムが落ちると同時に小鳥はその枝から飛び立つ。ソファイアがそれを見て悲鳴をあげると，ブリフィルもそれに合わせて悲鳴をあげる。そしてこの騒ぎに駆けつけた大人たちに，ブリフィルは自分の行動の理由を，小鳥を自由にしてやりたかったからだと説明する。更に，トムが川に落ちたとき飛び立った小鳥は鷹に捕まってしまったと付け加えソファイアを悲嘆にくれさせる。そしてソファイアはブリフィルが小鳥の自由のためなどではなく意地悪のために小鳥を放したと見抜くが，オールワージーはブリフィルの言葉をすっかり信じてしまう。そして，読者も小鳥が鷹に捕まったことは事実だと——手品のトリックに引っ掛かるように——信じてしまうが，ソファイアが悲鳴を上げた時とブリフィルが悲鳴を上げた時の時間差，それに，トムが枝から落ちる時と小鳥が飛び立つ時，更に小鳥が鷹に捕まる時の時間差などを考えるとこの事実は怪しくなってくる。

それに，彼の性格と行動（その動機）の関係が重要である。後に，ブリフィルが財産目当てにソファイアをトムから横取りしようとするときにブリフィルがソファイアに示すサディスティックな感情やトムに対して示す嫉妬心や敵愾心も考慮しなければならない。ブリフィルの行動は単なる意地悪からではなく，トム，ひいてはソファイアに対する，もっとどす黒い感情，作品中で数度言及されるオセロの嫉妬心よりもむしろイアーゴの嫉妬心につながるものに発している。彼は小鳥を放すとき，単に紐を手から離すのではなく，わざわざ足の紐を解くが，これは小鳥を完璧に自由にしてやるためでは無論ない。小鳥そのものは彼にはどうでもよい存在であるが，小鳥がソファイアによってトミー（即ちトム）と名付けられ，可愛がられているからこそ，彼にとって小鳥はトムと同然の存在であり，それ故，小鳥の足に結ばれた紐は小鳥を縛るものではなく，トムとソファイアの絆を結ぶものであるからこそ，ブリフィルにとっては是非とも外さなければならないものである。ブリフィルにとって小鳥は憎しみの対象になっても，その身を案じてやる対象ではない。そう思ってこの事件を振り返ると不自然なところが見つかる。フィールディングの作品はリアリズムだけでは捉え切れないロマンス的な要素があると思って作品を読むと，ついつい鷹が小鳥を捕らえるのを見たというブリフィルの，現実にはなかなか起こりにくい話を信じてしまいそうになる。ブリフィルが小鳥自体に関心をもっていると錯覚させられてしまってもいる。小鳥は折れた枝に止まっていたのだから，トムが落ちていくのとほぼ同時にその枝から飛び立ったと考えられるけれど，第一の疑問点は，小鳥のことを案じてもいないブリフィルがそれを目で追うであろうかということである。また，そうしたとしても，空を飛んでいたのか，それともどこかに止まっていたかも定かでない鷹——人間が下で騒いでいるから余り近くにいたと考えにくい——に，飛び立った小鳥が何秒位の間に捕まるものか分らないが，要するに，ブリフィルが小鳥が鷹に捕まるのを見た後で，木から落ちたトムに目を転じて，ソファイアに倣って悲鳴をあげるのは時間的にもかなり困難だし不自然である。順番を逆にして，トムが落ちたのを見て悲鳴を上げた後で小鳥が鷹に捕まるのを見るのは更に一層困難である。そして実際，ソファイアは「その時はジョウンズの身を案ずるあまり気づかなかったのだ」(“ . . . for her Concern for *Jones* had prevented her perceiving it <u>when it happened</u> . . . ” [IV, iii]，下線筆者）と語り手が言うように，トムの落ちるところを見ていたソファイアには，小鳥のこともブリフィル以上に気になったはずなのに，そのような光景は目に入らなかった。作者は作品の或る箇所で，「ああホウガース！余に御身の鉛筆あらば！」(“O, Hogarth, had I thy Pencil!” [X, viii])

と述べるが，騙し絵も描いたと言われるホウガース（ホガース）ならばブリフィルの嘘の世界の図が物語の実際の世界の絵の中に闖入している模様をどのように描いたのだろうかと思わされる(13)。それはともかく，ブリフィルのトムへの敵意を考えると，ブリフィルにとって気になるのは小鳥の運命よりも，むしろトムの木からの落下とその結末であり，トムが木から落ちるのを悲劇的結果を期待しつつ生唾を飲み込むようにじっと見つめていたので悲鳴をあげるのがソファイアより若干後れたととるのがむしろ自然であるし，ずっと面白い。そして，やや後れながらも悲鳴を発するのを忘れなかったところがいかにも偽善者の彼らしい。また，鷹が小鳥を捕らえる光景は不自然な騙し絵ではあるが，これがたとえ彼の作り話だとしても，この嘘には「トム，くたばれ」という彼の願望と憎しみがこもっているようで，そういう意味でとても興味深い。

小鳥が捕まった話をするのは語り手ではなく，あくまでもブリフィルであるから，それだけなら彼が嘘をついていると断言してもよいが，しかし語り手がこの出来事に触れて「それが起こった時」（朱牟田訳では「その時」）と表現するので，それが起こったのは客観的な事実と取るべきだという主張もありうる。しかし，既に見てきたように語り手の言うことは信頼できないことが多々あるので，ここでも事実に反することを述べているとも，また“allegedly”のような副詞がある場合と同様に，ただ単にブリフィルの言い分を伝えただけの表現と取ってもよかろう。

6. ブリフィルの隠された「殺意」

本作品で偽善者の予想あるいは期待が最も見事に裏切られて痛快極まりないのは，フィールディングの作品中の最大最悪の偽善者とも言えるブリフィルが，医師の大げさな診立てゆえに自分は重病と思い込んで，死を覚悟しながら病床に伏せっているオールワージーに，医師の制止も聞かずに彼の母親（オールワージーの妹）のブリジェットの死を知らせにいく場面である。ブリフィルは医師と連れ立って病室に向かうが，二人が一緒にオールワージーと顔を合わすのではなく，医師がまず入ってブリフィルがやや後れたことが知らされる。そして，一足先に部屋に入った医師はオールワージーの脈を取ってオールワージーの病が峠を越えたことを本人に告げる。そして，オールワージーが目を上げて天に対し回復の見込みを感謝するや否やブリフィルが打ちひしがれた様子で，目にハンカチを当てながら寝台に近づいて，オールワージーに訃報を伝える。ここで語り手はブリフィルが医師の言葉を聞いたか聞かなかったか明確にしないが，聞かなかったと取るのが自然であるし，そうでないとこの場面の面白みが無くなる。この時，ブリフィルがどうしても伯父に母の死を知らせようとするのは，重病の伯父にショックを与えて死期を早めようしたと普通理解されるが(14)——語り手はそのようなことには一切触れない——，それはブリフィルが母親の死の知らせと同時にトムが自分の異父兄弟であるという母親から伯父への，ブリフィルにとっては非常に不都合な内容の伝言と手紙を直前に受け取っていたからである。そして，この後者の事実については，この段階では読者は何も知らされない。そして，作品を再読すると，ブリフィルが少し遅れてオールワージーのもとに行った意味がより良く理解できる。さしもの大悪党も——作品を最後まで読むと，ブリフィルがダウリングを通じて偽証人を使ってまでトムを死刑にさせようとした事実が分かる——母親の死を嘆く孝行息子と伯父の病気を案ずる優しい甥を演ずる偽善の仮面を被る（変身する）ために僅かな準備時間（一呼吸）が必要だったと思われるが，そのために彼は医師の言葉を聞き漏らして無駄な演技をさせられる破目になる。ここにも作者による偽善者に対する痛烈なしっぺ返しが認められる。

しかし，この段階では知らされないが，この場面には別の人物がいたことが後で明らかにされる。実は，オールワージーの病状が気になったトムが病室を訪ねてきて，高いびきで寝ていた看護中の女を静かにさせた後，側に座って自分も看護に当たっていたのである。そしてそこへ医師とブリフィルが「一緒に入ってきた」（“came in together” [V, ix]）と語り手は言うのだが，ここではほんの僅かの時間差を無視してしまっている様子である。そして，この時になって初めて，部屋の中で医師が再度ブリフィルに対しブリジェットの死をオールワージーに知らせるのを止めるように注意したことや，もしトムがブリフィルの意図を知って

いたら止めていただろうということを読者は知らされる。

この後，オールワージーは妹の葬儀の世話をブリフィルに一任するが，ただ自分ならばこの時に採用したであろう人物の名を口にしたと読者は知らされるが，この人物が何者であり，また実際に採用されたかどうかは最後まで明らかにされない。しかし，大団円の後に，オールワージーの邸に何と『ジョウゼフ・アンドルーズ』の有名な登場人物である牧師のアダムズがトムとソファイアの間に生まれた子供の教育係に採用されたことを知らされるので，多分，この人物がオールワージーの頭にあったと読者は想像するしかないだろう。

7. ブリフィルの隠された意図

トムはオールワージーの病気の危険性が全て去ったのを知って大喜びをし，したたかに酒を飲んですっかり酩酊し，かつて小鳥事件が起こった例の川べりで横になり，ソファイアの優美な姿態を空想し，清浄無垢の忠節を彼女の俤（おもかげ）に捧げた後で，彼女の名前をナイフで近くの木に刻みつけようと立ち上がったところへ野良仕事からの帰りのモリーが姿を現し，彼を誘惑する。彼女はたまたま通りかかったのではなく，トムを誘惑する機会を求める意図があってここを通ったとも考えられるが，これは例の屋根裏部屋の事件の後のことで，既に二人の関係は切れてしまっている。二人はここで長い談判——15分ばかり——の後で一緒に木立ちの中に姿を消す（この時間の長さが映画などでは無視される）。ここの章題では酒が淫蕩の前触れになるとされているが，彼が誘惑に屈したのは酒のせいばかりではなく，モリーが来る前に，彼がソファイアについて奔放な空想に耽っていたことと，モリーの誘惑のうまさも考慮されなければならない。それはともかく，二人が木立ちに姿を消す直前にブリフィルがトムの姿を認め，一緒にいたスワッカムに男女が良からぬ意図で茂みの中に隠れようとしていると告げるけれども，トムの名前は出さない。そして語り手はその理由が何かについて，自分の判断を控えて「賢明な読者」に任せるという。

> ジョウンズの名は言わぬがよいと彼は考えたのだが，その理由は賢明な読者の判断にまかせねばならぬ。我らは多少とも思いちがいの恐れのあるかぎり，人の行動の動機を断定したくないと思う者である。

> As to the Name of *Jones* he thought proper to conceal it, and why he did so must be left to the Judgment of the sagacious Reader: For we never chuse to assign Motives to the Actions of Men, when there is any possibility of our being mistaken. (V, x)

そこで，語り手の要望に応えてブリフィルの沈黙の動機を考えて見よう。

スワッカムはブリフィルの話を聞くと，件の二人の行為を阻止しようと近づきながら「慨嘆を交えて報復を口にする」(“ . . . he breathed forth Vengeance mixed with Lamentations; . . . ”) が，これはブリフィルにとって予想外であったろう。そして追っ手の二人が木立に近づくと，茨の擦れる音に加え，スワッカムの発する声で敵の接近を予告されたトムが跳び出し，彼女をかばうために二人の接近を阻止しようとして，三人の男の間で二対一の格闘が開始される。ブリフィルが最初にトムの姿を認めたとき，両者間の距離は100ヤード以上あったが（トムの連れが女性であることは確かだが，誰だかはっきり分からなかった），急ぎ足で近づいたとしてどれだけの時間が掛かるか良くは分らないので，判断は微妙になるけれども，モリーの企みは未遂に終わらされたと想像できなくもない。しかしブリフィルは後にこの一件をオールワージーに語るとき，「不幸にもあの男がある女と，言うもはばかるようなことをしているのを見たのです」(“. . . we unluckily saw him engaged with a Wench in a Manner not fit to be mentioned.” [VI, x]) と，まるでその現場を見たかのようにオールワージーに報告する（この言葉のせいでもないだろうが，トムとモリーがここで実際に交わったととるのが普通の読み方になっている）。

この虚偽の報告から判断すると，ブリフィルがトムの名を言わなかったのは，スワッカムがトムの名を聞けば興奮して声を上げると考えて，その名を伏せて静かに二人に近づき現場を取り押さえようとして――現場を見ようという変態的欲望を持って――いたのに，狙いが外れてしまったことを表しているように思われる。ブリフィルは，語り手の「男子の無神経のゆえにサモスの神秘がむくつけきものの目にさらさるることのなきように」(“ . . . lest, through the Indelicacy of Males, the Samean Mysteries should be pryed into by unhallowed Eyes: . . . ”) (V, xi) という言葉や，「去れ，心汚れし者はここを去れ，/ とく森の外に出でよ，と巫女は呼ばわれり」(“－Far hence be Souls prophane, / The Sibyl cry'd, and from the Grove abstain.” [V, xi]) というウェルギリウスの一節で禁じられている不埒な行為――男女の営みを見る行為――を行おうとしたのである。(本作品ではそのような場面を読者にも見せないことが鉄則になっている(15)。)

上記の二人対一人の戦いをたまたま地主ウェスタンが目撃し，劣勢の方に加勢した結果，トムたちに凱歌があがったところへ，ソファイアを含むウェスタンの連れたちがやってくる。そして，ソファイアが現場を見て失神してしまうが，語り手は，それを「血を見たせいか，父親への心配のせいか，その他の理由で」(“from the Sight of Blood, or from Fear for her Father, or from some other Reason” [V, xii]) と説明するけれど，読者は彼女が血だらけのトムの姿を目にしたからだと理解することを期待されている。そして，トムはソファイアが気を失ったことを知ると，戸惑う他の者を尻目に，ソファイアを川べりに急いで運び，彼女に川の水を掛けて息を吹き返させる。それから，父親と叔母と牧師とが追いついてくると，

> その時までこの愛らしい重荷を腕に支えていたジョウンズは，このとき手を放したが，同時に優しい愛撫を彼女に加えた。彼女の意識が完全に回復していたとすればこれに気づかぬというはずはない。されば彼女がこの勝手なふるまいに不興の色を示さなかったということは，そのとき彼女がまだ十分に正気を取りもどしていなかったことになると余には思われる。
>
> *Jones*, who had hitherto held this lovely Burthen in his Arms, now relinquished his Hold; but gave her at the same Instant a tender Caress, which, had her Senses been then perfectly restored, could not have escaped her Observation. As she expressed, therefore, no Displeasure at this Freedom, we suppose she was not sufficiently recovered from her Swoon at the Time. (V, xii)

だが，語り手のこの説明にも拘わらず，我々はむしろソファイアの意識は戻っていたと取るべきであろう。

読者がここでソファイアの失神の理由を誤解しなかったとしても，別の誤解をした者が一人いた。そのとき，ソファイアの失神の現場を目撃した一人，ウェスタン女史は，ソファイアの失神の原因になった人物について，大きな勘違いをしてしまい，この後，兄に「さて賢明なお兄さま，兄さまはブリフィルさんのことをどうお考えです？ソファイアはあの人が気絶して倒れているのを見て気を失いませんでしたかしら？」(“And now, good politic Sir, what think you of Mr. *Blifil*? Did she not faint away on seeing him lie breathless on the Ground?” [VI, ii]) と言ってソファイアとブリフィルとの縁談を勧めることになる。

8. ウォーターズ夫人の再度の誘惑

物語も終わりの近くで，ウォーターズ夫人（ジェニー・ジョウンズ）が牢に入れられたトムに面会にいく場面がある。そこで，トムに切りかかって反対に剣で刺されてしまった，自分の愛人のフィッツパトリックが実は命に別状はないので，トムも殺人の罪で処刑になる惧れのないことを彼女はトムに告げる。世間には親子と信じられながら，一夜のベッドを共にした仲でもあるトムに対する同情の念から，彼を安心させようという善意の意図がこの訪問にあったことは否定できないが，語り手は彼女の訪問の動機については何も明

言しない。しかし，多くの読者が彼女はトムを再度誘惑するつもりで訪れたと読むのは[16]，次の一節によると思われる。

> されば我らはこれ以後の会話を抹殺するとして，ただ最後はすこぶる罪のない結末となって，夫人よりもジョウンズのほうがはるかに満足したことだけを言っておこう。というのが，ジョウンズは夫人のもたらしたニュースに有頂天になったが，夫人のほうは，はじめて会ったときは今日とまるでちがった印象を受けたこの男の，懺悔めいた態度があまり気に入らなかったのである。（下線筆者）

> We shall therefore suppress the rest of this Conversation, and only observe, that it ended at last with perfect Innocence, and much more to the Satisfaction of *Jones* than of the Lady: For the former was greatly transported with the News she had brought him; but the latter was not altogether so pleased with the penitential Behaviour of a Man whom she had at her first Interview conceived a very different Opinion of from what she now entertained of him. (XVII, ix)

次々と相手を換えては恋の遊戯に耽ってきたウォーターズ夫人はトムとの会話の間に，それも，語り手によって伏せられた部分（「これ以後の会話」）で，前回アプトンの宿で用いたのと同類の恋の武器を駆使して，トムの誘惑を試みたと想像できるが，ついに彼に同じ過ちを犯させることができず，彼女には不満な結果に終わったのである。ここでも邪な狙いが見事に挫かれるのである。

9. その他の事例

読者の想像を誘う事柄が他にも幾つかある。例えば，妊娠をしている事実が周囲の者に隠せなくなるほどになって，一旦は懲治監送りが決定したモリーは，トムが彼女のお腹の子は自分の子だと治安判事オールワージーに申し開きをしたことによって罰を免れるが，その後で彼女はスクウェアとも肉体関係を持ったことが明らかになるけれど，そのとき彼女のお腹の子はどうなっていたか気になるところだ。そして，これについては，その頃には既に出産が終わっていたという説がある[17]。確かにその時点で「その小さな子」（“the little Child” [V, vi]）という呼ばれ方をするので，既にお腹から出ているような印象を与える。因みに，ブリフィル大尉がオールワージーに向かってトムのことを「あなたの寝床に捨ててあった小さな子」（“the little Child which you found in your Bed.” [II, v]）と呼んでいる。こうしてモリーが生んだはずの子はその後完全に「黙殺」されるが[18]，母親の方は，物語の後日談の部分で，パートリッジとの結婚の話が進行中で，ソファイアの橋渡しでまとまりそうだと知らされる。

また，トムの熱烈な弁護者となるミラー夫人は，トムが私生児であることは決して本人の罪ではないと彼を庇うけれど，彼女自身が婚前交渉で出産をした――即ち，私生児を生んだ――という指摘もあるそうだが[19]，彼女が夫と5年の結婚生活を送った後に死別したと言われるにも拘わらず，長女と次女の歳の差が7才あるように書かれているのは確かに奇妙である（XIII, v)。作品中には明らかに作者の記憶違いと思われる部分も散見されるので，上の年齢も作者の記憶違いによるものだと言えなくもないが，他の例にも見られたように，数字が謎解きの手掛りになることもあるので，この場合も作者が上記のような事実を推測することを読者に期待している可能性は確かにある。

ジェニー・ジョウンズが母親の協力を得て，ブリジェットの身代わりとなって，自分がトムを生んだと嘘の自白をした件についても，いくらお金が欲しいとは言え，母娘が簡単にそのようなことに協力するものだろうかという疑問が拭えない（しかし，モリーの母親はお金が娘から貰えるので娘の不純な異性交遊を見てみぬ振りをしているのも事実である)。そして不自然であるが故に，何か語られない事実があるかもしれないと，読者は別の理由を推測するが，語り手の方もそれを促すように，ジェニーが私生児を二人生んだとい

う噂が立ったという情報を提供する。根も葉もない噂ととればそれまでだが，これが真実を含んでいるとすると，ジェニー母娘の行動がもっと分かりやすくなる。ジェニーが実際に誰かとの間に私生児を一人生んだとすれば，後は一人も二人も大差ないという理屈もありうるからだ。そして，ジェニーが私生児を生んだとした場合，その相手の男をサマーと取る説もあるが，これには十分な根拠がないけれど(20)，パートリッジの家に当時もっとジェニーの相手をした可能性のある若者がいたことが知らされるので，むしろこちらの方が実際の相手であったと想像するのが自然である。

また，ブリジェットがブリフィル大尉と結婚する前に，彼女とブリフィル医師の間に親密な関係があり，息子のブリフィルは大尉ではなく医師の子だという見方もある(21)。もし，それが本当で，大尉がそのような事実に気付いたとすれば，彼の兄に対する冷たい仕打ちは分りやすくなるが，ただ語り手はそのような関係については「……さすがに罪の快楽にふけることなどは彼は夢にも考えなかった」(“ . . . as to criminal Indulgencies, he certainly never thought of them.” [I, xi]) と否定しているので，判断は微妙である。

おわりに

よく言われるように，語りには騙(かた)りの側面がある。そして本作品の読者は語り手の言葉に騙されずに，何かを手掛かりにして，洞察力を働かせながら隠された真実を発見することを求められている。作者が「……諸君が，もしこの大作にとりかかった我らの意図を，なにひとつ諸君の賢断 [洞察力] に委ねまいとする者のようにお考えなら，あるいはまた逆に諸君が，時にかかる才能を行使せずにもこの数巻を通読して自身の楽しみあるいは利益を獲得できるとお考えならば，それはどちらもとんだ思いちがいというものである」(“ . . . thou art highly mistaken if thou dost imagine that we intended, when we began this great Work, to leave thy Sagacity nothing to do; or that, without sometimes exercising this Talent, thou wilt be able to travel through our Pages with any Pleasure or Profit to thyself.” [下線筆者，XI, ix]) と述べるように，読者が能動的な読みをしなければ，作品は楽しみと利益を与えてはくれない——言い換えれば，面白くてしかも為になるものにはならないのである。

しかしこのような語りは，読者に推理小説的な秘密の発見の楽しみ与えることは確かであっても，それが主要な目的であるとは思われない。むしろ，作品世界で登場人物のほとんどが偽善や虚栄やその他の理由で物事を隠そうとするが，人間のそのような特性を語りに取り込むことによって，そのような実態を強調しながら，語り手と読者が暗黙の了解のもとに戯れの隠し事を楽しむようになっている趣がこの作品には認められる。それと同時に，読者が隠蔽された事実を発見することは，作者が自然の中の真実を発見することと重ね合わされている面もある。作家に求められる発見する能力の必要性が次のように述べられている。

> 天分とは畢竟，我らの達し得るまた知り得るすべての事物を洞察して，それらの本質的相違を識別する精神の力と余は解釈したい。言い換えれば発明と判断の力である。この両者はともに我らが生まれながらに天から与えられるものであるから，それを合わせて天分と呼ぶのである。この二者については多くの者が大きな考えちがいをしているらしい。発明と言えば普通は創造能力の意味らしく，そう解すれば，たいがいの物語(ロマンス)作家が最高度にこの能力を持つとうぬぼれるのも無理ではなくなる。が実は発明とは単に発見というだけの意味（言葉の意味もそうなのである），敷衍するならば，我らの考察するあらゆる対象の真の本質を急速に賢明に洞察する力である。これは，同時に判断力を伴わずにはめったに存在し得ない。なぜといって，二つのものの真の本質を，その相違を識別せずしてどうして発見したといえるか，余には考えられぬことである。

> By Genius I would understand that Power, or rather those Powers of the Mind, which are capable of penetrating into all Things within our Reach and Knowledge, and of distinguishing their essential Differences. These are no other than Invention and Judgment; and they are both called by the collective Name of Genius, as they are of those

Gifts of Nature which we bring with us into the World. Concerning each of which many seem to have fallen into very great Errors: For by Invention, I believe, is generally understood a creative Faculty; which would indeed prove most Romance-Writers to have the highest Pretensions to it; whereas by Invention is really meant no more, (and so the Word signifies) than Discovery, or finding out; or to explain it at large, a quick and sagacious Penetration into the true Essence of all the Objects of our Contemplation. This, I think, can rarely exist without the Concomitancy of Judgment: For how we can be said to have discovered the true Essence of two Things, without discerning their Difference, seems to me hard to conceive. (IX, i)

作家に求められる資質の一つとして天分（Genius）があるが，それは発明（Invention）の才を含んでおり，そして発明は普通に考えられるように，存在しないものを創り出すことではなく，存在するものを発見すること（Discovery）だという。そして，読者は作者が作品を書くにあたって行う，そのような発見の作業を作品を読む過程で追体験することを求められているとも言えるのではないだろうか。

一つの作品の語り手の特性は必ずしも首尾一貫する必要はないと言われるが，本作品の語り手の特性も見た目には明らかに揺れている。各巻第１章に出てくる「作者」がそのまま物語の語り手になっているように思われる部分もあれば，「作者」のスタンスを捨てて調査結果の報告者になり，かなり不確かであやふやなことを伝える語り手になっているように見える場合もある。そして，後者の場合があくまでも「作者」の単なる振りではあっても，そういう素振りに読者が敏感に応えて，読者が最終的には「作者」を信頼し，自然を参照しながら想像力を働かせて作品を理解しようとするときに，作品の一番面白い読みが可能になるように思われる。

注

（１）本論に於ける作品（英文テキスト）からの引用は，Henry Fielding, *Tom Jones*, ed. Sheridan Baker (New York: W. W. Norton & Company, 1995) による（以下*Norton Tom Jones*とする）。引用文の後ろの括弧内のローマ数字は巻・章を示す。また，作品の訳は朱牟田夏雄訳『トム・ジョウンズ』（岩波文庫）を使うが，論旨の都合などで表現を変えている部分もある。

また，朱牟田訳で使われている人名「オールワージ」「ノーザトン」も本論では「オールワージー」「ノーザートン」と変える。そして「ブライフィル」は，従来そのように表記するのが一般的であったが，同作品の映画版などの発音に従って，最近は「ブリフィル」と表記するものも出てきたので，本論もこれに倣う。

（２）作品外の実際の作者と区別するために，作品中で“Author”と名乗る人物は「作者」あるいは語り手と呼ぶことにする。

（３）John Preston, *The Created Self: The Reader's Role in Eighteenth-century Fiction* (New York: Heinemann Educational Books, 1970), 94-131 も再読の問題を扱っている。

（４）Preston, 112 参照。

（５）フィールディングの作品のだまし絵（*trompe l'oeil*）的特性については，Stephen C. Behrendt, "Art as Deceptive Intruder: Audience Entrapment in Eighteenth-Century Verbal and Visual Art," *PLL* 19/1 (1983): 37-52; Robert M. Adams, *Strains in Discord: Studies in Literary Openness* (Books for Libraries Press, 1971), 52ff などを参考にした。

（６）ラボフによる“ナラティヴ”の基本構造（能智正博「“語り”と“ナラティヴ”のあいだ」，『＜語り＞と出会う―質的研究の新たな展開に向けて』，能智正博編，ミネルヴァ書房，2006 年，20 頁及びジャン＝ミシェル・アダン『物語論―プロップからエーコまで』，白水社，2004 年，118-139 頁参照）。

（７）John B. McKee, *Literary Irony and the Literary Audience: Studies in the Victimization of the Reader in Augustan Fiction* (Rodopi N. V., 1974), 12; Preston, 124-26; J. Paul Hunter, *Occasional Form: Henry Fielding and the Chains of Circumstance* (Baltimore and London: John Hopkins U. P., 1975), 121; Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction* (Chicago & London: The University of Chicago Press, 1983), 217 参照。

（８）本作品の主人公が私生児であることには大きな意味があると考えられるが，Parkerは，この作品の主人公のみならず，作品のテキストを私生児と見る立場から作品を論じる（Jo Alison Parker, *The Author's Inheritance: Henry Fielding, Jane Austen, and the Establishment of the Novel* [DeKalb: Northern Illinois Univ. Press,

1998])。またSchmidgenは，私生児の，場所に縛られない優れた観察力と，場所を変え，新しい状況に自然に溶け込む能力について述べている（Wolfram Schmidgen, "Illegitimacy and Social Observation: The Bastard in the Eighteenth-Century Novel," *ELH* 69 [2002]: 133-66)。

また，捨子の問題は，R. W. Malcolmson, "Infanticide in the Eighteenth Century," *Crime in England 1550-1800*, ed. J. S. Cockburn (Princeton Univ. Press, 1977), 187-209に詳しく論じられている。

(9)「私は語り手がその作品の規範（つまり，内在する作者の規範）を代弁し，それに従って行動する場合，彼を＜信頼できる＞語り手と呼び，そうでない場合＜信頼できない＞語り手と呼んだのである。……また信頼できないということは通常，嘘をつくということでもない。」(" . . I have called a narrator reliable when he speaks for or acts in accordance with the norms of the work (which is to say, the implied author's norms, *unreliable* when he does not. . . . Nor is unreliability ordinarily a matter of lying, . . . " [Booth, 158]) なお，訳文は米本弘一他訳　ウェイン・C・ブース『フィクションの修辞学』，書肆風の薔薇，1991年のものを使った。

(10) McKee, 12参照。ブースはこれを，「時にフィールディングが＜私＞ [語り手]に押し付ける無知」("the ignorance Fielding sometimes imposes on his 'I'" [Booth, 160]) と言う。

(11) フィールディングの作品『アミーリア』(*Amelia*) における匿名の問題については，拙論「『アミーリア』における匿名の手紙」，『日本ジョンソン協会年報』第25号，2001年5月，6-10頁参照。

(12) この事件については沢山の言及があるが，一番詳しく扱っているのは，Bernard Harrison, *Henry Fielding's* Tom Jones: *Novelist as Moral Philosopher* (Sussex University Press, 1975), 28ff。彼は，「鳥を追ってあの木に登ったジョウンズ君が水に落ちた時，鳥はまた飛び立って」というブリフィルの言葉は，小鳥が鷹にさらわれた責任をトムになすりつけている，というような読み方をする。

Hatfieldは，小鳥を鷹にさらわせることによって，ブリフィルの小鳥を自由にしてやるという理屈を作者が退けていると言う（Glenn W. Hatfield, *Henry Fielding and the Language of Irony*, [Chicago and London: Univ. of Chicago Press, 1965] 183)。

トムは小鳥トミーが逃げたのを忘恩行為と考えて鳥の悲運に同情しないが，それはトム自身がオールワージーに対する忘恩ゆえに家を追われ，終には絞首刑に処せられ命を失いかねない状況になることを暗示するという見方もある（Maaja A. Stewart, "Ingratitude in *Tom Jones*," Norton *Tom Jones*, 751)。

Gardinerは，ブリフィルを「読み手」「書き手」「批評家」などになぞらえて，この小事件の意味を考える（Ellen Gardiner, *Regulating Readers: Gender and Literary Criticism in the Eighteenth-Century Novel* [Newark: Univ. of Delaware Press, 1999], 75)。

また，この事件は財産法の問題を扱っているという見方もある（Simon Stern, "*Tom Jones* and Economies of Copyright," *Eighteenth-Century Fiction* 9/4 [1997]: 443)。

小鳥が逃げたというのはブリフィルの嘘だという指摘をしている論文等は（既に，この可能性を拙論「『トム・ジョウンズ』に於ける愛と結婚について」[『下関市立大学論集』第49巻第2号（2005年9月）81頁注（2）] で示唆している)，筆者は寡聞にして知らない。

(13) Behrendt, 40, 45, 48.

(14) ブリフィルのこのような意図を指摘している文献には次のようなものがある。Anthony J. Hassall, *Fielding's* Tom Jones (Sydney Univ. Press, 1979), 28; Parker, 73; Patrick Reilly, Tom Jones*: Adventure and Providence* (Boston: Twayne Publishers, 1991), 45, 50, 52; Richard J. Dircks, *Henry Fielding* (Boston: Twayne Publishers, 1983), 99.

(15)「しかし余はそのような絵像を公衆に示したいとはさらさら思わない。翻訳と称してわが国にもすこぶるへたくそな訳が提供されているある種のフランス小説のなかに近ごろ並べられているあの絵像の類は，余はカーテンで隠したいと願う者である。」("But I am so far from desiring to exhibit such Pictures to the Public, that I would wish to draw a Curtain over those that have been lately set forth in certain French Novels; very bungling Copies of which have been presented us here, under the Name of Translations." [XIII, ix])

(16) トムが女性の誘惑を拒絶する回数をここでのウォーターズ夫人の誘惑を入れて三回とする者が多いが（Williams, 82; Hassall, 94; Reilly, 47; Empson, 725; Eileen Jacques, "Fielding's *Tom Jones* and the Nicomachean Ethics," *English Language* Notes 30/1 [1992]: 24)，R. S. Craneは，トムの道徳的変化をもたらしたものとして，ウォーターズ夫人の誘惑を加えずに，ベラストン夫人との決別，ハント夫人の結婚申し込みの辞退，そしてフィッツパトリック夫人からの求愛の拒絶の三つの経験を挙げるのみである（R. S. Crane, "The Plot of *Tom Jones*," Norton *Tom Jones*, 688)。

(17) Michael Irwin, *Henry Fielding: The Tentative Realist* (Oxford: Clarendon Press, 1967), 106参照。

(18) 物語が「捨て子」(「私生児」) を黙殺 (処分・遺棄) することについては，服部典之「遺棄された小説起源」，『未分化の母体—十八世紀英文学論集—』，仙葉豊他編，英宝社，2007年，84-85参照。

(19) Zunshineは，ミラー夫人も娘ナンシーの婚前妊娠より18年前に，そのナンシーを婚前に身篭ったというAmoryの説を紹介する (Liza Zunshine, "The Spectral Hospital: Eighteenth-Century Philanthropy and the Novel," *Eighteenth-Century Life* 29/1 [2005]: 5; Hugh Amory, *Law and the Structure of Fielding's Novels* [unpublished Ph. D. diss., Columbia Univ., 1964], 344-47.")。本論の筆者は後者の論文は残念ながら未見。

(20) John Sutherland, "Who Is Tom Jones's Father?" *Can Jane Be Happy? More Puzzles in Classic Fiction* (Oxford Univ. Press, 1997), 23.

(21) トムだけではなく，ブリフィルもまたブリフィル医師の子だというが，はっきりとした論拠を示しているわけではない (Jennie Wang, *Novelistic Love in the Platonic Tradition: Fielding, Faulkner, and the Postmodernists* [Rowman & Littlefield, 1997], 92, 98)。

(原稿受理：2007年9月20日)